



県病医療ニュース

病院機能評価3rdG:Ver2.0認定病院

〒870-8511 大分市豊鏡二丁目8番1号 TEL097-546-7111(代表) 内線7712:県病ニュース係



※当ニュースへのご意見・ご感想は県病ウェブサイトをご利用ください。

大分県立病院ウェブサイトはこちら

外科

大腸がん手術の最前線

～医療の未来を切り拓くロボット手術～

近年、大腸がんの罹患率は増加の一途をたどり、2022年の全国統計では死因の第2位（男性2位、女性1位）になっています。当院においても年間100例以上の大腸がん手術をおこなっており、患者さんは年々増加しています。

大腸がんの手術方法は「**開腹手術**」「**腹腔鏡手術**」に大別され、開腹手術は従来のお腹を大きくあけておこなう手術です。一方で、腹腔鏡手術はお腹に1～2cmの小さな穴を数か所あけて、特殊な鉗子^{かんし}を使って手術をおこないます。開腹手術に比べ、傷が小さく、術後の痛みも少ないために体への負担が少なく、早期退院が可能です。

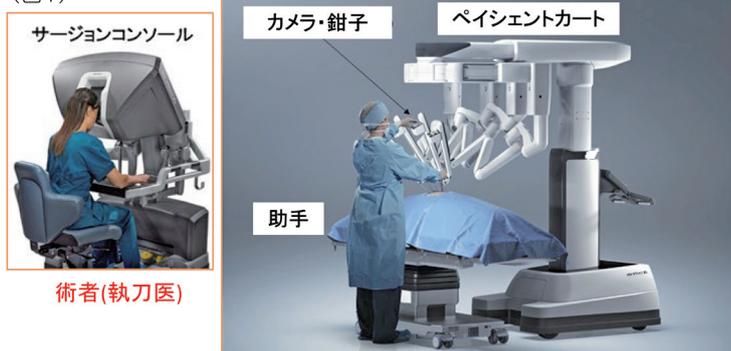
今回、腹腔鏡手術のさらなる進化として**ロボット手術支援機器(ダヴィンチ)**が導入されました。ロボット手術は従来の腹腔鏡手術に比べて傷の大きさや体の負担はほとんど変わりませんが、より精密な手術ができると期待されています。ペイシェントカート(ロボット本体)にカメラと操作用の鉗子を取り付け、小さな傷からお腹の中へ挿入します。術者はサージョンコンソールに座り、3D画像を見ながら遠隔でロボットを操作し、手術をおこないます(図1)。ロボットの鉗子は通常の腹腔鏡手術の鉗子と比べ、関節がよく曲がり手ぶれをしないため、より正確で繊細な手術が可能になりました(図2)。

ダヴィンチは2023年に当院へ導入され、まずは泌尿器科手術でスタートし、2024年から当科で大腸がん(直腸がん)手術が開始され、現在では婦人科、呼吸器外科も含めた4診療科でほぼ毎日ロボット手術がおこなわれています。ロボット手術では機械操作に医師、看護師を含めた手術室スタッフの経験も必要となりますが、当院では症例数が多く、安定した手術として確立されています。

外科では今後、結腸がん、胃がん、肝臓がんなどにも適応を広げていく予定で、多くの分野においてロボット手術が中心となる時代が来ると考えられます。(上記の手術は患者さんの病状によって、適応の判断が必要となりますので、詳しくは主治医にお尋ねください。)

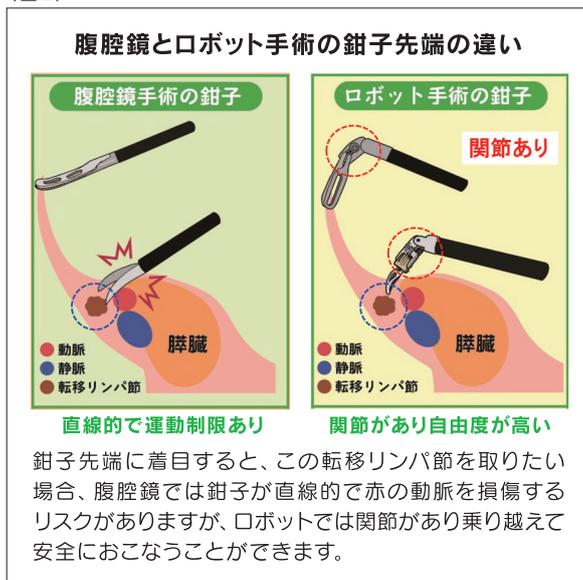
(外科 副部長 堤 智崇)

(図1)



術者(執刀医)

(図2)



当院の新生児病棟（NICU・GCU）には「先天性心疾患」の赤ちゃんも入院します。「先天性心疾患」とは生まれつきの心臓の病気で、100人に1人の割合で発生しますが、生まれてすぐに新生児病棟に入院して治療が必要な赤ちゃんも少なくありません。

またこのような心臓病は手術が必要なことも多いのですが、大分県内ではこどもの心臓外科手術ができないので、県外に赤ちゃんを救急搬送しなければならず、生まれてすぐの緊急入院や、遠方の病院へさらに転院搬送になることは、赤ちゃんへの負担が大きいのみならず、ご家族は赤ちゃんと離れ離れになってしまい精神的負担も大きくなります。

最近では、お母さんのお腹を通して、超音波検査で胎児の心臓の病気を調べることができ、ご家族も私達医療スタッフも、赤ちゃんが生まれる前から治療の準備ができることが増えてきました。

当院の総合周産期母子医療センターでは新生児・小児の心臓専門医と産科医が協力して「胎児心臓超音波検査」をおこなっており、病気によっては、生まれる前から手術をしてもらう病院と連携し、特に生まれてすぐに手術が必要になることが予想される場合は生まれる前に紹介し、出産から生まれた後の治療までお願いすることもおこなっています。

「胎児心臓超音波検査」を通して、大分県で生まれる赤ちゃんのご家族をサポートします。

（第一新生児科部長 森鼻 栄治）



看護師ほか医療スタッフの
臨時職員を募集しています。
詳しくはこちら